

## 2014 年度森泰吉郎記念研究振興基金 成果報告書

### 中国・温州市の旧市街地における空間形態および利用の変遷

慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 修士課程

卓 揚

#### 1 研究背景

中国はおよそ五千年の歴史を持つ国であり、独自の文化が今日まで続き、多くの地域が絶え間なく伝統を継承してきた。都市とは文化の集積を具現したものであり、歴史都市とはその豊かな歴史の淵源が文化の発展の道筋を表すものであって、人類にとっての貴重な財産なのである。1997 年山西平遥古城と雲南麗江古城二つ歴史都市が「世界文化遺産リスト」に加えられたきっかけとして、これは中国における歴史都市保存の事業が大きな進歩を示すものである。しかしながら中国の歴史都市保護の活動にはまだまだ多くの困難があるということもはっきり認識して、厳しい戦いに立ち向かっていかねばならない。

現代、中国では高度経済成長により都市化が急激に進行している。都市がスプロールしている一方で、旧市街地でも大規模な再開発が進み、高層ビルの建設や道路整備、空間の西洋化に進み、古代から築き上げられてきたアイデンティティが一部失われるようになった。

温州は 1978 年の改革開放以来、著しい経済発展を遂げ、自営業や私営業企業が主体となる「温州モデル」として全国から注目を集めてきた。旧市街地の改修や不動産開発においては、経済の利益追求に牽引されて、高い容積率や密度が追求される。都市形態も激変して、主要河川と小河川は 1950 年から続々と埋められて道路にされると水郷的な特色グリッド状と骨格状の都市構造が失われきた。旧城内のあるブロックが更地にされ、まったく別の高層ビルが建てられると、旧市街地に囲まれ、歴史的町並みの保存事業が極めて困難になる。この問題を解決には、温州旧市街地空間形態の発展過程を把握することが必要になると考える。しかし、地理的な建築学的な方面からの空間形態の分析は十分になこれているとはいえない。

#### 2 研究目的

歴史的空間形態は、自然や社会経済、技術等一定の条件の下で形成され、特定の機能を意味している。これから、歴史的空間形態との調和を考えながら開発を誘導する都市計画とか、歴史と未来とのつながりを深くさせることとかできるようになる。そこで本論文は温州市旧市街地を事例に、その歴史的空間形態を地理学的な建築学的な

視点から詳細に明らかにし、温州の歴史的な都市形態の保全と経済発展の両立を目的として、具体的には次の3点を本論文の目的とします。

- (1) 空間形態の原型を明らかにすること
- (2) 空間形態の変容とその特徴を明らかにすること
- (3) 歴史的な環境保全コントロールの経緯を明らかにすること

### 3 研究結果

#### 3-1 都市形態の原型と変遷の経緯

東晋 323 年に永嘉郡建郡と共に、外城と堀の建設が行われた。城壁が城内の山に建てられ、海壇山、西郭山、松台山、積谷山、華蓋山が繋がった。

唐時代まで続く「坊市制」は、都市の内部を閉鎖的な街区で区画し、商業地と居住区を明確に区別されてきた都市制度である。五代・後梁時期に内城が建てられ、そして城壁は「外城・内城」二層構造となった。内城を建てられると共に、ますます「東に廟、南に市場、西に居住区、北に港、中央に内城」の都市構造が形成されてきた。官庁は温州城の中心になっていて、建城以来に建設された廟の殆どが温州城の中央東部に立地した。城の東部と西部が坊の密度が高かった。この東部には、官庁区が接していた。そのうえ東甌王廟、文昌廟などにも近い。中心東部が温州のなかでも高級住宅地として早くから開発が進められた。

宋時代に至って「坊市制」崩れと共に店舗や市場が都市中に置かれるようになって、南北の幹線道路に沿って商業地が形成され、そこから伸びる東西の支線道路に沿って住宅地が形成される傾向が強く見られた。1095 年の 36 坊設立に基づいての居住区が調整された。私的教育施設もその時期から芽生えはじめた。子城西部の住宅地はより一層開発され、橋や道路の密度がもっとも多くなっている。風致に関するものは少なく、四周を水で囲まれた長方形の住宅地が連なっていた。住宅地全体が住宅で占められていた一般住宅地であった。四周を水で囲い、その北側に道路を通す住宅地の計画モデルが、明清時代においても継続してとり入れられた。温州士大夫に関する史料の最も多いの南宋中期を中心に、彼らの住まいなどの確認できる場所で、一つの集中地区にあるとみられるのが西南部にあった山の周辺である。官紳区は風致とかかわりの深い立地をする場合が多かったとされており、由緒ある寺院の立ち並ぶ山の付近は、温州城の中において西南部と考えられる。

元時代に入ると、王朝が遷移し、元政権を握った外来民族が地盤を固めるために、

旧市街地内城を囲っていた城壁は一つ城門以外全部取り壊され、内城堀と城壁の跡に民居が建てられた。

明清時代になると温州の都市構造はかなり複雑になっていた。城内には文教地区や歓楽街、倉庫街や地方官庁があった。また寺町や庭園は風致的な景観もあるから、温州の中には潤いもあったことがわかる。東の官庁街・寺町、西部の居住区、北部南部の商業区、二つ直川は城内各地を結ぶ機能を果たしておる。

#### (2) II期 (近代時期) : 西洋化への進み (近代の変容)

1876年に温州は「芝罘条約」により開港され、半封建半植民社会の都市となった。温州においてもある種の近代的な都市建設が始まった。例えば、新しい建築タイプである教会堂、学校などが出現した。また近代的な都市基盤施設と中洋折衷の商店建築が建ち並ぶ街などが出来た。しかしながら、温州の都市の構造と景観には殆ど変化がなく、依然として水郷都市としての伝統的景観を保っておった。

#### (3) III期 (計画経済時期 1949-1978) : 建設減速期 (現代の変容 1)

1949年建国以降温州の都市のあり方とその規模が質的な変化された。都市の面積は平方キロメートルに満たなかったのが(旧市街地の4.5平方キロメートルに城門外の市街地化地域を含めても)、今日は1000平方キロメートル余りに拡大している。旧市街地を中心として北側甌江を除く、三方へ拡張拡張するというもので、都市の中心地区と旧市街地とが重なりあっているというものだった。

1958-1978年の間、政治運動の思想によって、建国以来に作られた都市計画が失効し、無計画な住宅や工場の乱立と占用が都市全体で行われた。

#### (4) IV期 (1978-2000) : 「旧城改造」による旧市街地の建設 (現代の変容 2)

1980年代に改革開放政策が採られて、温州は経済開発地区として採用されて以来、温州の都市の現代化と建設は急速なスピードで進んだ。都市の幹線道路や高速道路に代表される現代的な都市の基盤施設の整備進み、高層ビルは増えた。こういったものがこの都市は現代的都市になるという目標の基礎を固めた。

しかしながら、国レベルの歴史名城になるという目標から見れば、伝統的な景観が日毎に破壊に遭遇していると言わざるを得ない。「旧城改造」により、旧市街地では五馬街、解放路そして信河街、江浜路などの道路が拡張され、高層建築が建てられた。一方で伝統的な古民家のある地区が大量に取り壊され、文化財や史跡の周辺環境も破壊を受けた。人口や交通量の急激な増加のため、都市の環境も日増しに悪化した。

#### (5) V期 (2000-) : 歴史的環境保全理念の導入 (現代の変容 3)

2000年からは、政府が次第に問題の深刻さに気づき始め、温州歴史文化名城保全計画を策定し、一連の整備業に乗り出した。しかしながら、開発の速度が余りにも速すぎて、破壊した歴史的環境が広くて、今だに保全の方が追いついていない。都市歴史的環境の保全が都市の発展と共に協調して歩んでいくべきなのであり、これが目下温州の都市建設の大きな課題となっているわけである。

### 3—2 都市形態変遷の特徴

城は中国文化の特殊な産物で、非常に目立つ実物の標識ともいえよう。城は漢文化圏の人文地理上、独特の景観を構成し、政治史の上でも大きな役割を果たしてきた。城は古代においては明らかに防御用であった。城によって、侵入に抵抗して大変に効果があった。温州は、政治と軍事防御の影響を大きく受け、城の建造と政治の処点の設置は同時に行った。

城郭都市は周囲を堀、土塁、城壁などの防御施設によって囲んだ都市をいう。城門と水門の二重防御の形で、水上交通の盛んな温州では城壁だけでなく、水門による防御も重要である。城壁の範囲は建城から清時代に至っても大きな変化はなかったが、五代後梁の内城増建設と元時代内城の撤去事業により変化があった。1927年中山公園建設に伴う城壁開きから1945年まで18年にわたって、城壁撤去事業が行われ、現在内城は門と外城の華蓋山における一部の城壁遺跡しか残らなかった。

唐時代に「東に廟、南に市場、西に居住区、北に港、中央に内城」の都市構造が形成されてきた。宋時代に至って「坊市制」崩れと共に店舗や市場が都市中に置かれるようになって、東の官庁街、西部の居住区、北部南部の商業区、二つ直川は城内各地を結ぶ機能を果たしておる。

近代時期に入るこの形が弱くなり、建設面積が増加し、旧市街地東部も大量の住宅地が現れた。甌江畔埠頭への旧市街地の大通り、南北大街、五馬街、信河街は商業性質の道路となり、これは初歩的に商店街の雛形であること分かる。都市の中心は、官衙と廟から商店街と娯楽地を中心とする用途へと転換した。また立地する公共施設も廟と書院などから近代的な病院、学校などへと変化した。

計画経済期に温州地区工業用地の増加によって土地利用比率の変化は顕著であったが、旧市街地内の変化は少ない。旧市街地は住宅地、農業地緑地と公共建築、商業建築用地を含めた非工業用の生活用地が八割以上となる。都市全体の土地利用図と対応させてみると、これらの変化は主に、50年代の旧市街地内の零細な工場立地による

ものと、70年代末の旧市街地周辺部での大規模な工場の建設だと言える。

経済開放期初期の14沿海開放都市の一つとして、沿江都市から沿海都市への発展を目標とし、一部の行政機関と港区が都市東部に移し拡大された。

伝統的な街区は家、院落、院落の組み合わせと街路、水路、路地によって構成された。この種の随意とは別々時期に建てられた私人の住宅が年を渡るに従って現在のような構成になったためである。

前近代温州の人口をみると、宋時代と清時代はそれぞれ二つに達した時期である。唐宋時代に土木技術の発展によって、水路に近いにも住宅が建てられるようになった。明清時代に人口過密による狭隘も社会問題化してきた。その時、商業と手工業の発展と共に、水路と街路の間の敷地に小商人の用住宅が隙間すきまなく建てられた。

近代時期に商業地に登場した新たな業種とともに、新たな建築種類近代洋風建築が西洋から導入された。また車道、並木、歩道が配置され、近代的な道路形態の導入とともに、街路景観の西洋化が進められた。旧市街地の水路網はかつて重要な機能を果たしたままである。街路網は発達し、「縦に二本、横に四本」の形となる。そのため水路幅の縮小の現象もある。水路街路建物の配列はほとんど変わっていない。街路の幅が広がったが、計画前後の道路網は全部地区内の水路など地形要素に規定された自然発生的な形態をたもっていた。

現代に水路網は工業開発に伴って殆ど利用されなくなった。水路の埋立や護岸の占用、水路幅の縮小等の現象が著しく、水の汚染状況が進んでいる。新しい道路は殆ど水路を埋立て作られ、二重基盤目状の水路街路網パターンが殆ど残っていない。また中心部の旧住宅地での大規模な再開発が行われなかったため、元水路街路に区画される街区は街路に区画される街区となり、形状は殆ど変わっていない。水路空間の三つの原型をもとに、水路・街路断面パターンの変遷状況について調べた。変遷の仕方としては、水辺の増改築、水路の埋立、街路の拡幅、水辺建築の除去が見られる。

旧市街地内の商業と居住の矛盾を解決し、建築密度を下げるため、街区内の旧型住宅や低商住併用建築が多層や高層商住併用建築に改建された。街路に区画される街区のスケールが大体保たれたが、建物の更新と敷地の合併によって街区内の空間構成が消滅しつつある。現在伝統的な街区の半屋外の空間利用について、前庭の主な使われ方は洗濯、植木の世話、物干し、日光浴・夕涼み、気晴らしなどである。院落外の路地の主な使われ方は物干しとバイクや自転車置き場であった。路地に洗濯物がひるがえっていたり、近所づきあいの場となっている様子をよく見かけた。特に建物に

囲まれた小広場的な路地はヒューマンスケールの親密な空間として有効に使われている。コミュニティの場として、半屋外に適した行為のできる空間として積極的に評価されている。

清時代の住人の階層構成として、商人と手工業が最も多いと言える。その小商人用の住宅について、「上居下店」という温州の伝統的な店舗兼住宅は多く見られる。表通りの店舗は伝統的な民家の表の壁を取り除き、主屋を店舗として開放し、二階を居住空間や倉庫などとするのが多い。伝統的な店舗はファサードと一階の軒の部分のデザインが工夫される。

近代時期には伝統様式建築を継承する一方、洋式建築文化も伝播していた。二つ建築活動が互いに影響を与え、促進し合い、温州近代建築の軸として発展した。洋式タイプ建築は主に教会とオフィスビルであり、中洋折衷タイプ建築は主に店舗と民居である。店舗はファサードに工夫し、民居の方はファサードもあるけど、ドアや窓だけ洋式装飾要素が使われたのが多く見られる。

1949年以降住宅は工場等へ転用される以外、特に大・中型住宅には多家庭の転入が行われた。それによって人口密度が高くなり、過密居住の状況が深刻であった。2000以降保護計画モデル事業として一部の過密住宅に対し、回復作業が行れた。住宅敷地内の増改築が撤去され、敷地内の建物配置を回復することによって、従来の形とスケールがほぼ完全に継承された。

### 3-3 都市構造からの考察

北京、杭州、蘇州など有名都市に比べ、温州は普遍性があり、一般地方都市まで応用できる。普遍性がある一方で、同時に水郷都市、風水都市、城郭都市の特徴がある一般地方都市である。ここで、水郷都市、城郭都市、風水都市要素を中心に分析し、都市形態の変遷を三段階のダイアグラムにまとめた。

#### (1) I 期（建城初期一清）

風水説建城から城壁に囲まれた城には、その後宋代に入り水路整備が進み、基本的な構造は宋時代から継承されたものであった。清時代まで大きな変化なかった。

#### (2) II 期（近代時期）

近代に入り、まず城壁撤去事業により城郭都市の特徴が失われた。また都市計画による道路整備が行われるようになり、水郷都市の構造は、水路の埋立によって変化が始まった。

### (3) III期—IV期 (1949-2000)

建国以降都市化が緩慢に進んだ。都市計画失効期と旧城改造期により、水郷都市の構造がほぼ喪失された。また旧市街地内の二十八星宿の井が埋立て、「斗の城」で作られた市街地の小山がブルドーザーで削られて平地にした。この結果、水郷都市も風水都市の特徴が一層弱くなり、温州はまるで本当の平凡な「一般的」な地方都市となろう。

## 4 今後の展望

本論文は水郷都市・風水都市・城郭都市の特徴がある一般地方都市温州の旧市街地を中心に、それらの特徴を考察したものであるが、市街地の水郷特徴に関する考察はまだ十分とはいえない。また、市街地の水と山に関する考察により「山型水郷」確立可能性を確認したいと考えている。さらに、「山型水郷」モデルを確立するためには、より多くの事例の分析を通じた考察が必要となる。

以上により、これからの課題を挙げたい。

- (1) 温州における市街地の水郷特徴と「山型水郷」確立可能性に関する考察
- (2) 温州において「山型水郷」モデルを確定するための複数の事例分析
- (3) 水郷都市・風水都市・城郭都市の特徴がある一般地方都市における歴史的環境保全における議論への展開。